

新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の 代替校内実習での学生の学び

木下香織¹⁾*・安藤 亮¹⁾・難波 香¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、従来、認知症対応型共同生活介護でおこなっていた老年看護学実習は、学内での代替実習への全面的な変更を余儀なくされた。学内の学習資源を活用して計画した代替校内実習における学生の学びを明らかにすることを目的として、2020年度後期より2021年度前期にかけて学内実習にて老年看護学実習を行った学生のうち、本研究への協力に同意が得られた学生が提出した総括記録の記載内容を分析対象とした。テキストマイニングの手法を用いて、頻出語、共起ネットワーク、階層的クラスター分析をおこなった。総抽出語数54,581語であった。階層的クラスター分析では、8つのクラスターが抽出され、「老年看護の対象理解を中心とした学び」「高齢者支援の方法や場に関する学び」「幅広い視点からとらえる老年看護の学び」の3つの視点で学生の学びを確認することができた。感染状況と実習施設の状況を踏まえて、実習施設との協力・連携により、学習環境の整備を行うことが今後の重要な課題である。

(キーワード) 老年看護学実習、代替校内実習、学び、テキストマイニング

I 緒言

令和2年新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、文部科学省は「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について¹⁾」を厚生労働省とともに発出した。「実習に代えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」という事務連絡であった。日本看護系大学協議会の調査においても、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う影響を受け、なかでも老年看護学領域では臨地での実習を中止した大学が多いことが報告されている²⁾。A大学においても、従来は認知症対応型共同生活介護（以下、グループホームとする）にて行っていた老年看護実習について、2020年4月より代替の学内実習への全面的な切り替えを余儀なくされた。

A大学の老年看護学領域では、学生の実習の学びの評価にループリックを用いている。ループリックとは、ある学習課題について、いくつかの評価観点（到達度）と、それらを実践する尺度を設定したうえで、それぞれの評価基準が示されるマトリックス形式の評価ツールである。老年看護学では9つP（Person、Problem、Place、Process、Purpose、Perspective、Professionalism、Person-in-environment、Progress）と「学習者として」の10の視点に基づいて、学生に実習終了時に自己評価を求めている。新

型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前の老年看護学実習で学生は、グループホームという高齢者ケアの現場において実際に認知症等がある高齢者とかわかることで、高齢者の理解、高齢者とのコミュニケーションや日常生活援助といった実践能力、介護保険制度も含めた生活の場としてのグループホームの役割などについて学ぶことができていた。特に、専門職の援助過程（Process）では認知機能低下によって生じるコミュニケーション障害や不安に配慮した対応や利用者の生活の質に関わる多面的な支援について、看護の役割と機能（Professionalism）では老年期の特徴を踏まえたアセスメントやその人らしさを理解したケアの実践について学びを得ていることを確認してきた^{3) 4)}。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨地実習の内容の変更に伴って、看護学生の学びの状況に変化が生じていることが報告されている²⁾。また、様々な実践報告⁵⁻⁹⁾も散見され、各大学で限られた資源を活用しながら教育方法の工夫を試行錯誤していることがうかがえる。そこで、本研究では、新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替校内実習におけるA大学の学生の学びの内容を明らかにすることを目的とする。

II A大学看護学科 老年看護学実習の概要

A大学看護学科では、老年看護学の臨地実習4単位のう

*連絡先：木下香織 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

表 1. 2020年度 老年看護学実習 学内代替演習の計画表

第1週	月	火	水	木	金
1 限	オリエンテーション 認知症ケアの経験と ルーブリック	ユマニチュード学習 課題図書による学習 DVD 「ユマニチュード」鑑賞	課題テスト②	紙おむつ体験 KJ法グループワーク 結果図の共有 ディスカッション	ナラティブミーティング
2 限			誤答問題の調べ学習 と共有		
3 限	課題テスト①	「ユマニチュード」 ロールプレイ ディスカッション	DVD 「毎日がアルツハイ マー」または 「ぼけますからよろしく お願いします」鑑賞	文献抄読 2 編 ディスカッション	ナラティブミーティングの 省察 自己学習
4 限	誤答問題の調べ学習 と共有				
第2週	月	火	水	木	金
1 限	紙上事例GW 個人学習 グループ学習	紙上事例GW 発表	課題テスト③	文献抄読3編 ディスカッション	ルーブリックミーティング
2 限			誤答問題の調べ学習 と共有		
3 限	紙上事例GW プレゼンテーションの準 備・練習	DVD 「プロフェッショナル 介護福祉士 和田行 男の仕事 闘う介護、 覚悟の現場」鑑賞、 ディスカッション	文献抄読3編 ディスカッション	課題テスト④ 誤答問題の調べ学習 と共有	自己学習
4 限					

ち、2単位をグループホームにて受け持ち高齢者をもたない形態の実習を、あと2単位は地域高齢者を対象とした介護予防活動の実習を行っている。

本研究は前者の実習の代替学内実習についての報告である。実習目的・目標を以下に示す。

1. 実習目的

老年看護の対象者としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者自身の人権を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う。

2. 実習目標

- 1) 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する。(person)
- 2) 高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する。(problem)
- 3) 高齢者の生活の場を理解する。(place)
- 4) 高齢者の健康問題と生活機能に視点をのいた専門職の援助過程を理解する。(process)
- 5) 高齢者のQOLとそのゴールを理解する。(purpose)
- 6) 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する。(perspective)
- 7) 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する。(professionalism)
- 8) 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する。(person-in-environment)
- 9) 学習の成果と今後の課題を明確にする。(progress)

3. 実習方法：グループホームのユニットごとに4名の学生を配置し、学生はスタッフの提供する援助への参加や利用者とのコミュニケーションを中心として実習する。

III A大学看護学科 老年看護学実習の代替学内実習の概要

代替学内実習の目的・目標は、従来の老年看護学実習と同様の内容を掲げておこなった。

実習の内容とスケジュールの例を表1に示した。

1. 1週め

第1日は、実習オリエンテーションののち、学生に既習の実習や個人的な体験での認知症高齢者または高齢者への看護・ケアの経験についての振り返りを促した。語られた内容を学生とともにループリクと照合し、学生個々のレディネスの確認をおこなった。午後は、看護師国家試験の老年看護学領域の過去問題から40問程度出題し、不正解の問題について学生が分担して作成した解説を学生と教員で共有し、必要に応じて教員から補足説明した。「課題テスト」と称して、実習期間中に既習知識の確認をすることは実習前に周知している。「課題テスト」は、看護師国家試験老年看護学の全範囲を4回に分けて、1週めの第3日、2週めの第3、第4日にも同様の方法でおこなった。「課題テスト」は従来の臨地実習でも導入していた。

第2日は、「ユマニチュード学習」として、午前中は課題図書「ユマニチュード入門」¹⁰⁾で個人学習をおこなった。課題図書以外にもユマニチュードに関する書籍、雑誌を用意し、個人の読書ベースに合わせて学習した。全員が課題図書を読み終えたところで、DVD「ユマニチュード」を鑑賞し、学びや気づき、感想などを共有するディスカッションの時間を設けた。従来の臨地実習では、週1回の学内演習日に書籍を読み、1週目の第5日にDVD鑑賞をおこなっていた。

第3日は、認知症高齢者と家族の理解を目的として、ドキュメンタリー映像の鑑賞を新たに計画した。実習時期により「毎日がアルツハイマー」または「ぼけますから、よろ

しく願います。」を使用した。いずれも、認知症の女性高齢者の娘によって撮影されたドキュメンタリーである。鑑賞後、学びや気づき、感想などを共有するディスカッションの時間を設けた。

第4日は、実習開始前に学生にリハビリパンツを配布し、週末等を利用しておこなった着用体験の感想や気づきなどをKJ法を用いてまとめるグループワークを新たに計画した。事前の体験学習は、素肌に着用することを共通の体験とし、それ以外は学生の企画に任せた。リハビリパンツを着用して、一昼夜過ごす者、買い物など屋外に出かけてみる者、リハビリパンツへの排泄（排尿）を試みる者など、学生の体験内容はさまざまであった。KJ法でまとめられた成果図を発表し、学びや気づき、感想などを共有するディスカッションの時間を設けた。午後には、事前課題である「老年看護に関する文献検索」の結果として、学生が提出した研究論文の抄読をおこなった。従来の臨地実習でも同様の学内演習をおこなっていた。テーマの選択は個々の学生に任せており、学生が関心をもった多岐にわたるテーマの論文が提出される。文献抄読の時間には、1回2～3人の学生が選択した論文を取り扱い、2週目第3日、第4日にも計画した。

第5日は、実習1周めの学びのうち、印象に残った2つの学びを語り合う「ナラティブミーティング」をおこなった。事前に準備する記録用紙を含めて、従前と同様の方法でおこなった。ミーティング終了後、他の学生の学びを聞いた感想を記録し提出するまでが課題である。

2. 2週め

第1日、2日には、紙上事例を用いて、看護過程と同様の思考過程で課題に関する援助計画を立案し、ロールプレイで実践発表するグループワークを新たに計画した。教員が作成した紙上事例は、グループホームで生活を始めて1週間が経過した90歳代の女性高齢者Aさんと、清潔、食事、排泄、徘徊・転倒予防のケアに関する、グループごとに異なる課題に学生4名1組で取り組む。グループワークに入る前に、紙上事例を読んで、学生個々に「気になる情報（Aさんの強み、不足している情報など）」「支援が必要な事柄と支援の方向性」「具体的な支援内容」をA4版1枚の所定の用紙に整理し、それを持ち寄ってグループメンバーで検討した。第2日のロールプレイを用いた発表に向けて、第1日はプレゼンテーションの準備やロールプレイの練習までをおこなった。第2日はグループで立案した援助計画について説明し、援助場面をロールプレイを用いて発表した。その後、NHKドキュメンタリー番組「プロフェッショナル 仕事の流儀」のDVD「介護福祉士 和田行男の仕事 闘う介護、覚悟の現場」（2012年6月放送）のDVDを鑑賞した。「普通の暮らし」を目指して試行錯誤しながらグループホームでの認知症高齢者の生活を支援する和田氏のドキュメンタリー映像である。DVD鑑賞のあと、学びや気

づき、感想などを共有するディスカッションの時間を設けた。

第3日、第4日は前述の「課題テスト」と文献抄読をおこなった。第5日は、実習最後の学びの場として、ループリックに沿って学生がまとめた総括記録の内容を共有する「ループリックミーティング」をおこなった。事前に準備する記録用紙を含めて、従前と同様の方法でおこなった。

IV 研究方法

1. 研究対象

A大学看護学科2020年度後期より2021年度前期にかけて、代替学内実習にて老年看護学実習を行った学生男女合わせて64人

2. 方法

研究対象者が提出した、老年看護学実習で使用しているループリックに基づき記載された総括記録のテキストデータを分析対象とした。総括記録の記載内容をテキストデータとして、テキストマイニングの手法を用いて分析した。総括記録で使用されている単語の頻度や単語間の距離（Jaccard係数）、出現パターンを、共起ネットワークや階層的クラスター分析により明らかにした。

分析対象とした総括記録の記載内容の文章を、計量的分析手法（KH Coder 3¹¹⁾：テキストマイニングができるソフト）を用いて多変量解析した。テキストマイニングとは、分析対象のテキストデータの中で使用されている単語の回数や品詞の種類、単語間の関係性などに注目して、統計的手法を用いて計量的に解析を行う方法である¹²⁾。計量的分析手法を用いる利点には、素データがデータ全体の傾向における代表の度合いなどを数値指標で示すことができること、データの多様性、種類、分布などのデータ探索をおこなえることが挙げられる¹¹⁾。学生の記載した実習総括記録の膨大な記載内容の分析をおこなうにあたり、計量的分析手法を用いてテキストマイニングで分析することは有用であると判断した。

3. 分析手順

最初に、文書の単純集計を確認し、抽出語リストで出現回数の多い語を確認した。次に、共起ネットワーク図を作成し、共起関係を確認した。そして、抽出語からの階層的クラスター分析を実施し、デンドログラムをもとに、階層的クラスター分析で出現したコードの総括記載内容の確認を行った。KH Coder 3の操作に関する設定条件は以下のようにした。

頻出語のうち、強制抽出する語として「高齢者」「認知症」「おむつ」を指定した。強制抽出とは、分析に利用したい重要な言葉が、自動抽出ではうまく1つの語として抽出されないような場合に有効な機能¹¹⁾である。上記3つの語は「高齢」「認知」「むつ」で抽出されていた。

表2. 総括記録から抽出された語の頻出語（上位100語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
高齢者	588	社会	101	自身	56	聞く	38
理解	354	見る	95	実習	56	プロフェッショナル	37
人	348	ユマニチュード	91	尊重	54	強み	37
認知症	340	関わり	90	環境	51	知識	37
学ぶ	336	存在	90	気持ち	51	伝える	37
生活	326	今	89	生きる	50	発言	37
自分	228	本人	88	生きがい	49	価値	36
大切	226	重要	87	支える	48	交流	36
家族	218	関係	84	情報	45	向上	36
思う	206	人生	84	身体	44	文化	36
必要	205	感情	83	論文	44	声	35
支援	204	力	82	自尊	43	変化	35
考える	195	場	79	専門	43	問題	35
感じる	182	分かる	76	おむつ	42	サポート	34
行う	163	経験	74	提供	42	意思	34
看護	160	機能	73	背景	42	活動	34
ケア	158	施設	70	意見	41	今後	34
地域	145	DVD	68	自己	41	相手	34
介護	137	対象	68	多い	41	部分	34
役割	130	グループホーム	63	職種	40	与える	34
持つ	128	援助	63	QOL	39	連携	34
関わる	117	低下	63	影響	39	それぞれ	33
出来る	112	課題	59	様々	39	医療	33
知る	102	利用	57	コミュニケーション	38	信頼	33
患者	101	思い	56	行動	38	意識	32

共起ネットワーク

集計単位：段落、最小出現数20回、描画する共起関係（edge）の選択はJaccard係数=.20以上

階層的クラスター分析

集計単位：段落、最小出現数40回、方法はWard法、距離はJaccard係数、クラスター数はAuto

4. 倫理的配慮

成績判定終了後、研究責任者から対象者に、文書を用いて本研究の目的と方法、個人情報の保護や研究参加に関する利益・不利益等の倫理的配慮について説明した。研究協力に同意が得られる場合は同意書への署名を求め、同意が困難な場合は白紙のままでの提出を求めた。説明当日、研究対象者が当該講義室の使用を終了する予定時間を期限として、室内に設置した回収箱にて回収した。同意書提出後、研究対象者が同意の撤回を希望する場合は、研究者に口頭で伝えてもらい、同意撤回書の署名を求めた。データは個人が特定できないように、匿名化して取り扱った。対象者の同意の撤回への対応のため、データは連結可能匿名化にて取り扱った。

本研究は、新見公立大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：231）。

V 結果

研究対象者64人のうち、本研究への同意が得られた学生は58人（90.6％）であった。

テキストマイニングの結果、文書数は1,435文、すべての語の延べ数を示す総抽出語数（使用語数）は54,581（21,978）、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数（使用語数）は2,443（2,088）であった。なお、（使用語数）は助詞や助動詞のように、どのような文章の中にでもあらわれる一般的な語をKH Coderが認識して除外した結果、

表3. 品詞別頻出語（上位20語）

名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	形容動詞	出現回数
自分	228	理解	354	大切	226
家族	218	生活	326	必要	205
ケア	158	支援	204	重要	87
地域	145	看護	160	様々	39
役割	130	介護	137	不安	27
患者	101	存在	90	大事	24
社会	101	関係	84	可能	23
関わり	90	経験	74	健康	22
本人	88	機能	73	個別	20
人生	84	施設	70	明確	16
感情	83	援助	63	困難	14
対象	68	低下	63	ポジティブ	12
グループホーム	63	利用	57	安全	12
課題	59	実習	56	好き	12
思い	56	尊重	54	正常	11
自身	56	提供	42	多様	10
環境	51	意見	41	当たり前	10
気持ち	51	影響	39	迷惑	10
生きがい	49	行動	38	さまざま	9
情報	45	発言	37	自然	8

使用されている語数を示す¹¹⁾。

1. 出現回数の多い語

出現回数が多かった頻出語上位100語を表2に示す。また、品詞別抽出語（名詞、サ変名詞、形容動詞）のうち、多く使用された上位20語を表3に示す。なお、強制抽出した3つの語は「タグ」として別の品詞として抽出され、出現回数はそれぞれ「高齢者」588、「認知症」340、「おむつ」42であった。

2. 共起ネットワーク図

総括記録の記載内容の共起ネットワーク図を図1に示す。語と語を結ぶ線（edge）のうち、重要と見られるedgeを選んで強調して示す最小スパニング・ツリーのみを描画した。語の出現数に応じてそれぞれの語を表す円のサイズが異なり、語の出現数と円の面積が比例する¹¹⁾。

描画された共起ネットワークのうち、『高齢者』を中心に「学ぶ」「生活」「理解」「認知症」「大切」「人」「支援」「必要」「考える」（Jaccard=.23～.38）で形成されたサブネットワークが語の種類、語の出現数ともに最大であ

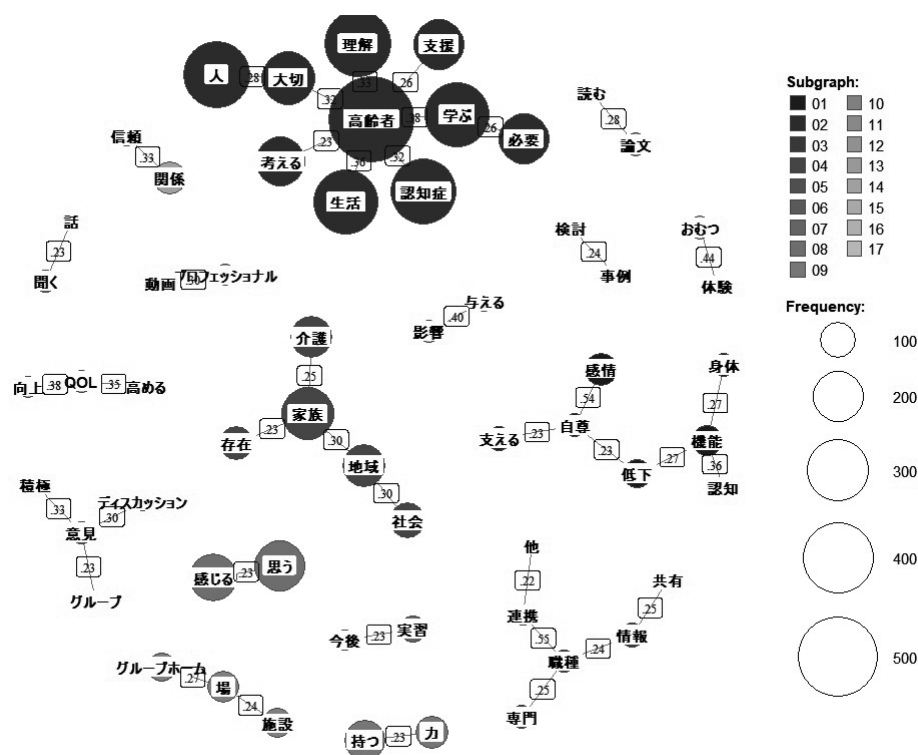


図 1. 共起ネットワーク図

表 4. クラスター分析の結果

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7	クラスター8
大切 人 認知症 理解 生活 高齢者 学ぶ 自分 思う 感じる 支援 必要 ケア 行う	経験 今 尊重 人生 生きる	関わる ユマニチュード 患者 看護 自身 課題 実習 考える	見る DVD 分かる 思い 本人 気持ち できる 関わり 知る 対象 情報	持つ 力 援助 感情 支える	身体 機能 低下	利用 施設 グループホーム 場	論文 存在 介護 社会 家族 地域 役割 生きがい 環境 関係 重要

った。また、ネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す「中心性」において、『高齢者』がすべての語で最も中心性が高かった。そのほかに、『家族』を中心に「地域」「社会」「介護」「存在」(Jaccard=.23～.30)、『低下』を中心に「機能」「身体」「認知」「自尊」「感情」「支える」(Jaccard=.23～.54)、『職種』を中心に「連携」「他」「情報」「共有」「専門」(Jaccard=.22～.55)、『意見』を中心に「積極」「グループ」「ディスカッション」(Jaccard=.23～.33)など17のサブネットワークがあった。

3. 階層的クラスター分析の結果

総括記録の記載内容の階層的クラスター分析によるデンドログラムをもとに、各クラスターのコードを表4に示した。8のクラスターに分類され、それぞれのクラスター

のコード数は3～14であった。

クラスター1のコードでは、「大切or人or認知症or理解or生活or高齢者or学ぶor自分or思うor感じるor支援or必要orケアor行う」が出現した。記載例では「自分自身の老いに伴う変化を、高齢者がどのように受け止めているのかを理解することも大切だと学んだ」「実習を通して、認知症高齢者に対する関わり方やケアの方法、本人や家族の思い、生活の場を学ぶことができ、そのなかで、認知症高齢者を1人の人として接し、最期までその人が望む生き方ができるように支援する必要がある、行っていかなければならないということに気が付くことができた」など、多岐にわたっていた。

クラスター2のコードでは、「経験or今or尊重or人生or生きる」が出現し、記載例では「高齢者がその人らしい最期

を迎えることができるように、その人のできる力をできるだけ引き出し、人生に付き添うような感覚でやりたいこと尊重し、サポートをできるような環境づくりと支援を行っていくことが大切だと思った」「過去があってこそ今があるのだということを理解し、高齢者の今だけを見るのではなく生きてきたなかでの身体的、非身体的にどう変わってきたのか、また、どう変わっていくのかを考えながらかわっていききたい。高齢者にとって価値観や人生観などといったものは長く生きてきて身についたものであるためそれらを尊重したかかわりを続けていくことが重要である」などがあった。

クラスター3のコードでは、「関わるorユマニチュードor患者or看護or自身or課題or実習or考える」が出現し、記載例では「ユマニチュードから、目的を明確にし、患者さんに適したレベルでの看護を行うことで、その人にとってプラスのケアとなることを学んだ」「老年看護学実習を通して、おむつを履いたり、認知症の方とユマニチュードなど関わりを学んで、今まで認知症の方と関わる機会が少なくて実際にちゃんとコミュニケーションが取れるだろうかか思っていたけれど、今回学んだことを活かしながら、どこかこれからの場で良い関わりができたらいなと思った」などがあった。

クラスター4のコードでは、「見るor DVD or分かるor思いor本人or気持ちorできるor関わりor知るor対象or情報」が出現した。記載例では、「個人的文化を知っておくことで、対象者とのコミュニケーションの話題になると分かったので、本人や家族から積極的に聞く必要性を学んだ。個人的文化を理解したうえで、実際に関わることはできなかったので課題が残る」「終末期の延命治療や看取りの場を決める際に、家族側は不安であるし、本人の気持ちも考えなければならず、容易に選択することができない。そこで、医師や看護師だけでなく、社会福祉士、ケアマネジャー、理学療法士など様々な職種が集まり情報共有・提供を行い、連携を図ることが大切だということを理解した」などがあった。

クラスター5のコードでは、「持つor力or援助or感情or支える」が出現し、記載例では『あなたはここにいる』ということ伝え、その社会性を取り戻し『絆』に結びつけて役割を提供することが認知症の人にとって自尊感情を支えるということであると理解することができた」「戦争経験があることで、私たちの死への感情と経験者の死への感情は大きく異なり、軽々しく発してはいけない言葉であることを改めて学んだ」「認知症のケアは『普通の生きる姿を支える』ことが、その人の持つ力を引き出すことにつながるということを理解することができた」「特にグループホームにおいて、利用者が主体的に生活しており、介護する側は利用者の本来持っている力を引き出すように関わっていることを学んだ」などであった。

クラスター6のコードでは、「身体or機能or低下」が出現し、記載例では「認知機能の低下と老いに伴い、できなくなることが増えていくが援助する側が高齢者の持つ力を引き出すことのできる環境を整えることで、できなかったことができるようになる」と学んだ」「老化に伴い生活機能が低下するが、人生経験や、その人の強みは失われることはない」などであった。

クラスター7のコードでは、「利用or施設orグループホームor場」が出現し、記載例は「グループホームは、利用者の方の住まい、生活の場であり、介護者ではなく、利用者が主体の場である」「動画視聴により、グループホームで暮らす高齢者にとってそこは生活の場となり、様々な人と同じ空間を共有したり、施設によっては買い物と一緒に外向き、食事を一緒に作るという取り組みがあり、地域ともかかわっていることがわかり、意欲を引き出すことで役割を果たせることも学び、高齢者の社会的な場にもなっていることを理解した」などがあった。

クラスター8のコードでは、「論文or存在or介護or社会or家族or地域or役割or生きがいor環境or関係or重要」が出現し、「身体機能、認知機能を維持する取り組みとともに高齢者の地域社会や家族内での役割を助ける取り組みを行うことで高齢者が自身の価値を見出すことができ、生きがいや楽しみを持った人生を送ることができると学んだ」「論文を読んだのディスカッションを行った際に、グループのみんなが実際に認知症の家族に対し、できることはできるだけ妨げずに、できないことだけそれとなく助けるといったようなかかわりをしているのを聞いて、高齢者にかかわる家族の存在の支える力というか、存在の重要性を感じた」「高齢者、個人の理解は深めることができたが、その周囲の環境や、社会との関連を詳しく理解することができなかった」

各クラスターのコード数が7個を超えるクラスターでは、デンドログラムの左側に加わる棒グラフから、各クラスター頻出語を参照した。クラスター1では「高齢者」「人」「認知症」「理解」、クラスター3では「考える」「看護」「関わる」、クラスター4では「出来る」「見る」「知る」、クラスター8では「家族」「地域」「介護」「役割」の出現回数が多かった。

VI 考察

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、従来、グループホームでおこなっていた老年看護学実習は、学内での代替実習への全面的な変更を余儀なくされた。学内の学習資源を活用して計画した代替学内実習における学生の学びを明らかにすることを目的として、老年看護学実習の総括記録の記載内容をテキストデータとして、テキストマイニングの手法を用いて分析した。頻出語、共起ネットワ

ーク、階層的クラスター分析の結果から、老年看護の対象理解を中心とした学び、高齢者支援の方法や場に関する学び、幅広い視点からとらえる老年看護の学びの3つの視点で考察した。

1. 老年看護の対象理解を中心とした学び

クラスター1では、「高齢者」「人」「認知症」「理解」が頻出語として抽出されており、老年看護の対象である高齢者、そして特に焦点をあてている認知症高齢者の理解を深めていると考える。頻出語の上位の語を多数含んでおり、代替学内実習の学びの中心であることがわかる。「必要」「支援」「ケア」「大切」などの語が含まれており、対象理解に基づいて、学生が老年看護において大切にしたい、大切にすべきと考える、必要な支援・ケアをとらえる、老年看護の理念につながる学びとなっていることが推察された。

クラスター6は、「身体」「機能」「低下」で構成され、加齢変化や疾病による高齢者の身体機能低下を学べていたことがわかる。クラスター2では「人生」「経験」「尊重」などの語で構成され、人生経験豊かな高齢者を人生の先輩として尊重することの重要性を学びとしていることがうかがえる。これらの学びが「対象理解」を示したクラスター1とは別の分類で抽出されており、加齢に伴う変化が起こる高齢者の機能低下を理解するとともに、人生の先輩として尊重される存在であるという対象理解の視点も重要な学びとして得られていると考える。

クラスター4では「出来る」「見る」「知る」を頻出語として、「DVD」という特徴的な語のほか、「本人」「気持ち」「思い」など多くの語を含んでいた。代替学内実習では、認知症高齢者と家族の理解、認知症高齢者への支援方法や支援の場としてのグループホームの理解を目的としたDVDの鑑賞とその後のディスカッションを実習内容としている。臨地での実習で高齢者との関わりを体験できないなか、DVD鑑賞を通じて、看護の対象である高齢者の理解、なかでも心理的側面の理解が促されていることが推察できた。教材としてドキュメンタリー映像を選択していることもその効果を高めていると思われる。

以上、4つのクラスターによって、老年看護の対象理解を中心とした学びを確認できた。代替学内実習で新たに取り入れた紙上事例のグループワークは、認知症高齢者への具体的な支援を考え、これらの学びにつながる学習内容であると考ええる。

2. 高齢者支援の方法や場に関する学び

クラスター3では「考える」「看護」「関わる」を頻出語として、「ユマニチュード」という特徴的な語を含んでいた。認知症高齢者へのケアの技法としてわが国に紹介されたユマニチュードは、「人とは何か」「ケアをする人とは何か」を問う哲学と、それにもとづく150を超える実践技術から成り立つ¹⁰⁾。書籍を読み、DVDでユマニチュードの実

践の効果を目の当たりにし、感嘆の声を上げる学生も多い。学生同士でユマニチュードのロールプレイを体験したり、ディスカッションをおこなう中で、高齢患者への実践ができないことが残念と語る学生も多い。高齢者への関わりかたの代表としてユマニチュードを学習し、臨地実習での看護に活かしたいと課題に考えている学生の姿勢が推察された。

クラスター5は「持つ」「力」「感情」を頻出語として、「支える」「援助」で構成されていた。加齢変化に伴う諸機能の低下や認知症などの影響がありながらも、高齢者が持ち続けている力の存在を認め、それを支え、援助に活かすことの重要性を示している。また、クラスター7は「場」「施設」「利用」「グループホーム」で構成され、高齢者の生活の場としてのグループホームに関係する学びを示している。

以上、3つのクラスターによって、高齢者支援の方法や場に関する学びを確認できた。

3. 幅広い視点からとらえる老年看護の学び

クラスター8では「家族」「地域」「介護」「役割」を頻出語として、「論文」という特徴的な語を含む多くの語で構成されていた。このクラスターの頻出語はいずれも老年看護との関係が深く、頻出語でも上位の語も多く含んでいた。「論文」を含むことから、代替学内実習でおこなっている文献抄読を通じた多様な学びの存在を示していると考えられた。A大学の老年看護学実習では、従来の実習形態から文献抄読を取り入れてきた。学生には、老年看護に関係して個人の関心のあるテーマで文献を選択するよう指示しており、文献のテーマは多岐にわたる。実習では見えにくい家族の課題や在宅ケアなどへの視点が広がる文献や、高齢者ケアに必要なQOL、看取りなど、文献の抄読を通じて学生の視野を広げ、自己の老年看護観を深めることにつながっていることが確認されている¹³⁾。クラスター8で抽出された語は、「役割」「生きがい」など個人に関わるもの、「家族」「関係」「環境」「地域」「社会」など社会的側面に関係するものまで多岐にわたっており、学生が幅広い視点で老年看護の学びを得ていると考えられた。

4. 今後の展望と課題

突然の代替学内実習への変更に伴い、学内で得られる学習資源を工夫して計画した老年看護学実習での学生の学びについて分析した。老年看護の対象理解を中心とした学び、高齢者支援の方法や場に関する学び、幅広い視点からとらえる老年看護の学びの3つの視点でまとめられる学びが得られていることがわかった。新型コロナウイルス感染症の影響を受けるより以前の老年看護学実習においても、高齢者なかでも認知症をもつ高齢者の理解に関する学びの中心に、専門職の援助過程(Process)³⁾や看護の役割と機能(Professionalism)⁴⁾に関する学びを確認してきた。本研究において、代替学内実習の学びにおいても、従来の学

外実習と同様の視点での学びが得られていることが明らかにできた。しかし、高齢者との直接的な関わりをもつことができないという状況的な相違点がある。そのため、学生の思考過程を促進するには、教員の意図的、教育的な関わりが重要であり、学生間の学びの共有が不可欠と考える。新型コロナウイルス感染症による影響は長期化しており、従来の形態での臨地実習にもどることが可能か、あるいはその時期も不明な状況である。そのため、感染状況などに応じて、より学習効果の高い代替学内実習を計画、指導することが求められる。

老年看護学実習を病院から学内に変更したことで、学生は高齢者との直接的な関わり不足と臨地での実習未経験の不安を抱えているという報告⁷⁾もある。また、オンライン実習⁹⁾やオンラインと通常の実習を組み合わせたハイブリッド型の実習¹⁰⁾など、コミュニケーションツールを活用した実習方法の学習成果も報告されている。そのため、感染状況と実習施設の状況を踏まえて、実習施設との協力・連携により、学習環境の整備を行うことは重要な課題である。

本研究における利益相反に関する開示事項はありません。

謝辞

本研究にご協力いただきましたA大学看護学科の学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局, 文部科学省高等教育局, 厚生労働省医政局, ほか: 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校・養成所及び養成施設等の対応について. https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2021-4-13)
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会: 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyouasaAB.pdf> (2021-8-14)
- 3) 木下香織, 難波香, 安藤亮: 認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学び ―第一報 専門職の援助過程-Process-に着目して―. 新見公立大学紀要, 41(2), 95-102, 2020.
- 4) 難波香, 木下香織, 安藤亮: 認知症グループホームでの老年看護学実習における学生の学び ―第二報 看護の役割と機能-Professionalism-に着目して―. 新見公立大学紀要, 41(2), 141-146, 2020.

- 5) 鈴木祐子, 井上聡子: 新型コロナウイルスの影響による精神看護学実習のあり方 シミュレーションを活用した学内実習. 精神科看護, 47(10), 62-67, 2020.
- 6) 鈴木聡美, 菅原啓太, 岡根利津, 他: コロナ禍における基礎看護学実習Ⅱ学内実習プログラム構築の取り組み. 三重県立看護大学紀要, 特別号, 25-30, 2021
- 7) 田端真, 清水律子, 竹村和誠: 新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと学生アンケートからの考察. 三重県立看護大学紀要, 特別号, 72-80, 2021.
- 8) 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子: 新型コロナウイルス禍の学内統合実習評価-学生アンケート結果から-. 東北文化学園大学看護学科紀要, 10(1), 27-42, 2021.
- 9) 坪井桂子, 秋定真有, 石橋信江, 他: オンラインの特性を活かした老年看護学実習. 看護教育, 61(10), 940-947, 2020.
- 10) 本田美和子, ロゼットマレスコッティ, イヴジネスト: ユマニチュード入門, 医学書院, 東京, 2014.
- 11) 樋口耕一: 社会調査のための計量的テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して第2版. ナカニシヤ出版, 京都, 2020.
- 12) 鈴木康宏: 看護師を研究対象とした和文献におけるテキストマイニングの使用状況の分析. 千葉科学大学紀要, 11, 161-177, 2018.
- 13) 古城幸子, 木下香織: 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その2) 文献抄読演習の役立ちと学びの広がり. 新見公立大学紀要, 35, 7-14, 2014.
- 14) 長谷川和子, 佐々木裕子, 佐藤ユキ子: 母性看護学・成人看護学臨地実習の代替策. 看護展望, 45(13), 40-45, 2020.